

1) リサーチ/制作のプラン

1. 戦中、戦後の東北の詩のリサーチから入り、インスピレーションを受けた事柄や、言葉の役割、またイメージを広げて行く。

人物キーワード：黒田喜夫、真壁仁、^{福士}福祉幸次郎、高木恭造、杉山平一、安西冬衛、赤坂憲雄 ^{詩人}

※今現在、プロレタリアートの詩から入る予定であるが、そこは、一つの通過点として捉える予定である。

2. 実際に足を使って、様々な場所で撮影、ドローイング、録音及び言葉を記す。インタビューなど出来れば、尚良い。また同時に東北の文化について考察を深める。

3. ベルリンに戻ってきてから、東北でのリサーチを受けて、ヨーロッパの土地へも赴いて同じようにリサーチを行い、イメージのシャッフルを行う。

4. 最終的にどのようなメディアを使ったアウトプットが良いのか、リサーチ物や、映像の編集などによってコンセプトを煮詰める。

5. 来年のはじめに、更に足りない部分を日本でリサーチし、最終的な展示物として昇華する。

※最終的な展示物のコンセプトとメディアの形態は未定。

2) 理由

これまで、ドイツ文学（フリードリヒ・ヘルダーリン、パウル・ツェラン、ローベルト・ヴァルザー、カフカ等）から特に影響を受け、作品を制作してきた。

一つ例を挙げると、フリードリヒ・ヘルダーリンの『ドナウ川』という詩は、場所に付随するイメージが言葉によって越えて行くこと。例えばドナウ川は地中海で終わりだが、その流れはギリシャからアジアまで続いているような感覚が得られる。ドナウ川は地中海に流れ出た後、逆流して他の川へ繋がって行くかもしれないし、他の川もまたそのように捉えることができる。緩やかに流れている川の感覚は文化を運び、時には残酷に私たちの生活を引き裂く。このような時間と場所を凌駕する感覚を持つことは、現在の事象をアウトプットする際に、重要であると考えられる。

東北は、私の生まれ故郷であるが、今までの制作の中で東北に焦点を当てることはなかった。なぜなら私の場合は、義務教育で習うような郷土文化よりも東京や首都圏に入ってくる外国の文化の方がより刺激的であったからだ。しかし、現在、様々な角度から相対的に考えるには、18年過ごした故郷のことをもっと身体的に考えざるおえないと思った。ヨーロッパでの制作を通して、身体が流れついて、呼びかけているようではない。2011年に津波が起り、福島原発の問題など、今の問題として東北に目が向いているが、以前から様々な側面で政権や経済の発展のために、民衆は苦を強いられ、それについてまた文化が生まれてきたことが取り上げられることは未だに少ない。捏造された美しい日本の東北！というイメージではなく、もっと長い時間軸や広い場所の中で揺れ動いている東北を顕在化し、現代の手法で照射できるように制作したい。

3) スケジュール

10月3日 東京着

10月4日 - 10月5日 マテリアルの収集 (本、描画材など)

10月6日 tarl ワークショップ (+花崎さん)

10月7日 山形へ移動

10月8 - 14日 文献リサーチ、ドローイング、及び必要があれば近隣で撮影。

10月15 - 24日 山形で撮影、必要であれば他県 (東北、北海道) に行く。

10月26日 山形から東京へ移動

10月27日 tarl ワークショップ (+大西さん)

10月28 - 29日 整理

10月30日 ベルリンへ

11月以降、10月のリサーチや制作を受けて、ヨーロッパでも制作、撮影をする。

11月でのヨーロッパの制作を受けて、日本とヨーロッパ、双方から作品を考える。

1月から2月 (予定) 再度日本に滞在して撮影及び、制作を行う。編集のち、可能であれば展示をする。